ビフォアアフターポップ TADのアメリカ美術＋

Before and After Pop: TAD Museum Collection +

ピカソ──肖像画とモデル

Picasso: Portraits and Model

国立美術館 コレクション・プラス
CollectionPLUS

特別協力：
国立国際美術館
国立アートリサーチセンター

富山県美術館
Toyama Prefectural Museum of Art and Design

ビフォアアフターポップ　TADのアメリカ美術＋

Before and After Pop: TAD Museum Collection +

竹花藍子

TAKEHANA Aiko

美術館設立とコレクションの方針

2017（平成29）年に移転新築した富山県美術館は、1981（昭和56）年に開館した富山県立近代美術館を前身としている。富山県立近代美術館が開館の折に掲げた「20世紀美術を展望する」「国内外の美術資料を系統的・重点的に収集保存する」[1]という方針に則って形成されたコレクションを引き継いでいる。

富山県立近代美術館は、富山県の置県百年事業の一環として1973（昭和48）年に建設計画が持ち上がった。京都国立近代美術館長の河北倫明、富山県出身で日展会長であった山崎覚太郎[2]、美術評論家の東野芳明と詩人の大岡信ら4名を相談役とし、1977（昭和52）年に富山県立美術館建設の基本構想が策定される。次いで元朝日新聞学芸部の記者であった小川正隆を常任顧問として迎え、小川を初代館長に1981年に開館した。

開館前後の収集活動

作品の収集活動は、1977年頃から始まっていたことがうかがえる。過去の収集資料を見ると、1977年から開館までを第Ⅰ期、開館からの10年間を第Ⅱ期と設定し、第Ⅰ期は「常設展示『20世紀美術の流れ』を想定してのコレクションづくり」、開館後からの第Ⅱ期は中期的展望として「今までの基本路線を変えないが、／・『系統的』『重点的』な力点のおき方を考え、／・開館後に生じた必要性を考慮して肉付けをはかる」ことを目標としていた。「20世紀美術の流れ」という常設展示のテーマを示すべく、多様な様式展開を見せたピカソを核とした戦前のモダン・アートと、第二次世界大戦以後の現代美術を基軸に据え、広く

ピカソ──肖像画とモデル

Picasso: Portraits and Model

内藤和音

NAITO Masane

「コレクションの軸」としてのピカソ

富山県美術館の前身にあたる富山県立近代美術館は、開館した1981（昭和56）年から、所蔵作品展示を「20世紀美術の流れ」と銘打ち、当時未完の世紀の美術動向を総覧できるコレクションを形成しようという、当時の公立美術館としては珍しい収集方針をとっていた。

中でも、パブロ・ピカソの作品は特に重要な役割を果たすと目されていたことが、開館時に刊行された図録『常設展示 20世紀美術の流れ』に記された巻頭言から窺える。

開館から約7年にわたり初代館長を務めた小川正隆は、開館までの収蔵品選定の過程で、富山県出身の詩人、瀧口修造と縁の深かったジョアン・ミロの名と並べ「ピカソとミロを基盤として、私は『20世紀美術のなかれ』を形成することが先決の問題となった」[1]と回顧し、相談役の一人だった京都国立近代美術館長（当時）で美術評論家の河北倫明は「まず導入部としてロートレックの作品を持ち、ルオー、シャガール、ドラン、マチスあたりの作品にまじって、この館自慢のピカソの佳品が4点[2]並んでいる。さらにピカソを展開の軸として、以下キュービズムの作家たち、シュルレアリスムの作家たちというふうに（中略）展示される」[3]と記している。

開館年度までに収蔵された作品のうち、海外の作家による絵画、素描および版画作品[4]は57点であり、そのうちピカソ作品は5点あった。1986年には《座る女》（1960年）も収蔵され、ピカソ作品の多さが特筆される。

加えて、これらの作品のうち特に絵画作品の制作年が約20年ごとであり、画家の、ほぼ20世紀と重なる長い画歴を総覧していることも注目でき、まさにピカソ作品を軸として20世紀美術の変遷を見せることを企図したコレクションといえる。

ピカソとモデル

ピカソは1881年にスペインの地方都市マラガに生まれ、1973年にフランスで没するまで、絵画、版画、立体等の膨大な作品を制作し、その生涯の中でキュビスム、新古典主義など様々に作風を変化させた画家である。

20世紀の美術全体を射程に収める構想であった。

このような収集方針を受けて、収蔵品第一号となるミロの《パイプを吸う男》(1925年)を1977(昭和52)年度に購入したことに始まり、10年の間にピカソをはじめとするモダン・アートからポップ・アートまでをコレクションに加えている。国内でも有数の充実した近現代美術のコレクションを築くことができたのは、開館から20年近く継続して購入が行えたことが大きく、戦後美術、特にネオ・ダダからポップ・アート以降の美術動向を幅広くカバーする作品群の形成につながっている。

コレクションにおける戦後アメリカ美術

当館の戦後現代美術の中でも層が厚いのがアメリカ美術である。ジャクスン・ポロック、ヘレン・フランケンサーラー、モーリス・ルイス、ジャスパー・ジョーンズ、ロバート・ラウシェンバーグ、フランク・ステラ、アンディ・ウォーホル、ドナルド・ジャッドなど、戦後アメリカ美術の優作を多数擁している。

バーネット・ニューマン、サイ・トゥオンブリーは、美術史上の位置づけを以てすれば「20世紀美術の流れ」の射程に含まれてよい作家であるが、すでに収蔵していた作品との兼ね合いなど諸々の条件から収蔵の機会に恵まれなかった。今回は、当館コレクションに、国立国際美術館からこの2作家の作品を拝借し、抽象表現主義からカラーフィールド・ペインティング、そしてネオ・ダダからポップ・アートへのアメリカ美術の推移を、より細やかに展示するものである。

1940年代後半から60年代にかけてアメリカ美術を席巻した抽象表現主義は、主題の抽象化、描画時の動きの表出、作品の巨大化、平坦で画面全体を覆う色面などを特徴とし、戦後美術の出発点に位置づけられている。なかでもポロック、ニューマンらはその代表的な作家とみなされており、当館はポロックの《無題》(1946年)を1980年度に取得、戦後美術コーナーの重要なピースとしてきた。ポロックは、床に敷いたカンヴァスに塗料を垂らして描くポーリングにより、激しい身振りを表現方法に導入することで新境地を開いた。《無題》では、黒いエナメル塗料による描線にその特徴を見ることができる。ニューマンは、巨大な単一の色面に「ジップ」と称される直線を配す独自の作風を確立し、画面を均一な色面で満たすカラーフィールド・ペインティングの作家に数えられる。例えば《夜の女王 I》(1951年、国立国際美術館蔵)を鑑賞する

また、生涯で2度結婚しているが、ほかにも多くの女性と親密な関係を持ったことでも知られ、作品の中にこれらの女性がモデルとして登場するために、作品から私生活が垣間見えることもこの作家の特徴の一つである。

ピカソと1918年に結婚した最初の妻オルガ・コクローヴァとは、ピカソ74歳の時、1955年に彼女が病死するまで婚姻関係が続いた。彼女の病死の前後、ピカソは当時20代半ばだったジャクリーヌ・ロックと出会い、1961年には彼女と2度目の結婚をする。この時期に制作された作品には、ジャクリーヌをモデルとした作品が数多く残されている。

富山県美術館所蔵《座る女》と国立国際美術館所蔵《肘かけ椅子に坐る裸婦》

当館所蔵の《座る女》(1960年)は、ジャクリーヌと結婚する前年、1960年に制作された。

真白な画面の中央に女性の姿が見受けられるが、女性はキュビスムの手法によって描かれており、目や鼻、口、耳が多視点的に表現されている。女性にはグレーにも見える黒色に、青と赤に近いオレンジ色という補色関係にある2色が多く用いられていることもあって鮮やかな印象を受ける作品である。

この作品は1986年に当館に収蔵され、その後、1996年にニューヨーク近代美術館(MoMA)で開催された展覧会「ピカソと肖像画」[5]に貸し出されている。同展図録では、当時MoMAの絵画・彫刻部門の名誉ディレクターであったウィリアム・ルービンが、1983年に行ったジャクリーヌとの対談の中で、彼女がこの作品について「Ça, c'est moi.(これ、私よ)」と語っていた[6]ことを明かした。このことから「座る女」でしかなかった画中の人物がジャクリーヌ自身であることがほぼ確実となった。

《座る女》から4年後の1964年に国立国際美術館所蔵の《肘かけ椅子に坐る裸婦》(1964年)は制作された。この作品のモデルもジャクリーヌとされている[7]が、同じモデルであっても2点が並ぶとその描き方は大きく異なったものに見える。

「ピカソと肖像画」展図録内のルービンによる論考では、《座る女》から《肘かけ椅子に坐る裸婦》が制作されるまでの間には、ジャクリーヌをモデルとして椅子に坐る様子を描いた作品が複数制作されているが、そこでは大きな変化がみられると指摘している。1961年から1963年にかけて描かれたジャクリーヌの姿は目、鼻、口といった顔の部分はおろか、顔全体が溶け合ったように一つの図形となり、そこに黒目や鼻の影、鼻の穴が書き込まれることで、かろうじて顔とわかるほどにまで抽象化されるのだ[8]。

しかし、1964年頃になると、肖像画は多視点的な描き方からは離れてゆく。《肘かけ椅子に坐る裸婦》では、顔立ちや体つきが《座る女》と比較して具象的なものに見える。特に太い線で描かれたふくよかな肉体描写が印象的で、特に首から下にかけて奥行きを感じさせる椅子に

ときには、2 m を超える濃紺の色面が鑑賞者の前に立ちはだかることになる。ニューマンの作品をあわせて展示することで、ポロックの作品に見られる身振りの導入に加えて、広大な色面と見る者の視野を圧するスケールという抽象表現主義の特徴を示す構成とした。

サイ・トゥオンブリーの字とも絵とも判別し難い躍動感のある筆致は、シュルレアリスムの自動書記のようであり、また不定形な線描は身体の動きを感じさせ、抽象表現主義の身振りの導入になぞらえることもできるだろう。トゥオンブリーはアート・ステューデンツ・リーグでラウシェンバーグに出会い、生涯の友人となる。1952年にはともにアメリカ南部とキューバ、そしてヨーロッパと北アフリカに旅行し、1953年から1955年にはラウシェンバーグのスタジオで制作をしたこともあった。抽象表現主義の隆盛ののち、その情感あふれる表現で独自の表現を確立した点に加え、当館でも多数所蔵するラウシェンバーグとの関わりの上でも、戦後美術の多様な展開を示す作家である。

註
1 『昭和59年度 富山県立近代美術館年報』富山県立近代美術館、1985年、p. 2。基本方針の年報への掲載は昭和59年度の年報が初。
2 肩書は1976年相談役委嘱時のもの。

坐した正面像として描かれ、2作を比較するとわずか数年の間での変化の大きさを実感する。

ピカソは、1973年に91歳でその生涯を閉じた。本展示では、ほんの数年の間に同一のモデルを描いた作品を比較したが、80代に差し掛かってなおその画風を変化させ続けた作家の旺盛な情熱に驚かざるを得ない。かつて当館の設立に携わった先人たちが、20世紀美術の軸として据えた画家の存在の大きさを改めて認識する機会となった。

註
1 『常設展示 20世紀美術の流れ』富山県立近代美術館、1981年、p. 4。
2 このときに近代美術館が収蔵していたピカソ作品は《広場の入口》(1900年)、《貧しき食事》(1904年制作・1913年出版)、《肘かけ椅子の女》(1923年)、《静物》(1941年)、版画集「キュビズム」に所収の《帽子をかぶった男》(1914年)の計5点。ここではそのうち版画集「キュビズム」以外の作品を指している。
3 前掲書、p. 7。
4 昭和56年度(開館年度)の富山県立近代美術館年報では、絵画、素描、版画、立体造形、工芸、デザインの6つの領域にわけて収蔵作品を計数し掲載している。
5 「Picasso and Portraiture」展は、1996年4月から9月にかけてニューヨーク近代美術館で開催されたのち、同年10月から翌年1月にかけてグラン・パレ(パリ)に巡回した。
6 *Picasso and Portraiture*, exh. cat., MoMA 1996, p. 16.
7 『国立国際美術館 所蔵作品選』国立国際美術館、2012年、p. 89。
8 *Picasso and Portraiture*, pp. 447–484. ジャクリーヌを描いた作品について MoMA キュレーターのウィリアム・ルービンが時系列に分析している。そこでは1961年から63年にかけては、「[そのほかの作例でも見られるように]彫刻的な探求が絵画と相互作用をなした」(同書、p. 475、内藤訳)ことが変化の理由として考察できるとし、人物像が立方体や円柱などの立体図形に変換されていく過程が複数のデッサン等を元に示されている。

国立美術館 コレクション・プラス
ビフォアアフターポップ　TAD のアメリカ美術 + ピカソ——肖像画とモデル
2025年7月17日 – 10月28日
富山県美術館　2階　展示室2

主催：富山県美術館

特別協力：国立国際美術館
国立アートリサーチセンター

[リーフレット]
編集：国立アートリサーチセンター

テキスト：竹花藍子（富山県美術館 普及課 学芸員）
内藤和音（富山県美術館 普及課 学芸員）

デザイン：今井千恵子（ロンディーネ）

制作：コギト

発行：国立アートリサーチセンター

発行日：2025年7月17日

Before and After Pop: TAD Museum Collection + Picasso: Portraits and Model
[The National Museum of Art Collection Plus Program]

July 17 – October 28, 2025
Toyama Prefectural Museum of Art and Design

Organized by
Toyama Prefectural Museum of Art and Design

With the special cooperation of
The National Museum of Art, Osaka
National Center for Art Research

LEAFLET

Edited by
National Center for Art Research

Text by
TAKEHANA Aiko
(Associate Curator, Toyama Prefectural Museum of Art and Design)
NAITO Masane
(Associate Curator, Toyama Prefectural Museum of Art and Design)

Designed by
IMAI Chieko (Róndine)

Produced by
Cogito Inc.

Published by
National Center for Art Research

© National Center for Art Research, 2025

「国立美術館 コレクション・プラス」は各地の美術館と連携し、そのコレクション展示をより充実したものとすることを目指して、国立美術館と国立アートリサーチセンターが新たに開始した事業です。

The National Museum of Art Collection Plus is a new program initiated by the National Museum of Art and the National Center for Art Research, with the aim of collaborating with museums around the country to enhance the exhibition of their collections.

国立国際美術館
THE NATIONAL MUSEUM OF ART, OSAKA

独立行政法人国立美術館
国立アートリサーチセンター
National Center for Art Research